

Title	静嘉堂文庫蔵『うつほ物語』紀氏本の本文と校合の痕跡
Sub Title	
Author	高橋, 諒(Takahashi, Ryō)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.1- 14
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

静嘉堂文庫蔵『うつほ物語』紀氏本の 本文と校合の痕跡

高橋 諒

一、静嘉堂文庫蔵『うつほ物語』紀氏本の概要

『うつほ物語』は、中世末期を遡る伝本が存在せず、現存諸本の本文には錯簡・誤脱があり文意不通の箇所を多く擁している。現存諸本の本文比較によつて、中村忠行氏が前田本系・流布本系・木曾本系・古活字本系・浜田本系の五つに本文系統を整理¹⁾、野口元大氏は俊蔭巻のみの古活字本系の本文は浜田本系に属するとして修正、現在は四系統に分類されている。また、新美哲彦氏は『うつほ物語』の諸本―主要四系統の位置関係及び性格³⁾（以下、新美論と称する）において四系統諸本の本文比較を通して、各系統の性格や位置付けを試みている。その四系統のうち、浜田本系統は、前田本系統とは密接な関係にあることが新美論においてすでに報告されている。本文の特色として、前田本系統の本文に基本的に忠実でありながらも、本文の字句を改めるなど改変も少なからず見られる。また、「春日詣」巻の卷末文である「藤のか、れるを」以下「桂の段」の本文が、「沖つ白波」巻末にあつて、「春日詣」巻には見えないことが挙げられる。

同系統の代表伝本である浜田本は、本文の筆跡や行取り、字間などを踏まえると内閣文庫本の透写本と目される。ただ、内閣文庫本は一五冊しか残存していないため、推定される書写年代が江戸中期と下るものの、二〇巻二〇冊揃の浜田本が有力伝本に位置付けられている。また、本奥書には「此本言葉つゝき手尔於葉仮名つかひ等何れも不審多しといへ共本のみ、令書写後見之輩右之以心得可有一覽者也／于時慶長十五年庚戌三月十四日 箇菴主人」とあり、慶長十五年（一六一〇）奥書本から派生したと考えられている。

同系統本の中でも、笹淵友一氏によつて「浜田本と前田本の中間的存在の感がある」とされているのが、静嘉堂文庫蔵紀氏本（以下、紀氏本と称する）である。「紀氏蔵書」の印記があることによつて、「紀氏本」と称される、二〇巻二〇冊の写本である。該本の巻序・巻名を掲げると、以下の通りである。

一 初巻 二 ふちはらの君 三 た、こそ 三ならひかすかま
うて 四 さかの院 四ならひ祭のつかひ 五 ふきあげ上
同吹上下 五ならひ菊の宴 六 あて君 七 初秋 八 おきつ
しらなみ付かつらのまき 九 くらひらさ上 十 くらひらさ中

十一くからひらき下 十二くにくつり上 十三くにくつり
中 十四くにくつり下 十五ろうのうへの上 十六ろうの
うへの下

首巻にあたる俊蔭巻は、「初巻」とあるのみで、巻名が記されてはいない。続いて第一〇巻目のあて宮巻は、「あて君」と表記される。序数が「一」「十六」まで振られていることから、『禁裏御蔵書目録』『黒御檐子第三』に記載される序数と同じである。第一一巻目の内侍のかみ巻は、『禁裏御蔵書目録』に「無表紙」とあり巻名が付されていないが、該本では、「初秋」とある。最後に、第一九・二〇巻目の「ろうのうへ上」・「ろうのうへ下」は、外題自体は正しいが、内容は逆である。後述の書誌的状况から考えると、表紙を改装したさいに誤ったかと思われる。

また、該本は吹上下・菊の宴・蔵開下・国讓上・国讓下・樓の上下の六巻を除いた一三冊の末尾に朱筆にて紀氏辰による校合奥書を有する。それによれば、藤原の君巻以下の一九冊は宝永七年（一七一〇）九月五日から二九日の間に「他本」を以て校合されている。校合奥書を持たない六巻も校合による朱書が存在することから、校合が行われたと考えてよいだろう。校合者である氏辰については、安藤菊二氏によって伝がまとめられているので、それによられたいが、代々神祇官職を世襲する紀家に養われ世襲の業を継いだ人物で、校合の行われた宝永七年は、東宮帯刀の職を解かれた、氏辰晩年の頃である。校合奥書から氏辰が『うつほ物語』一九冊を手に入れたのは九月以前となる。

俊蔭巻については、「此一冊不足故以他本補之宝永七十四氏辰」という墨書識語によると、「他本」を以て補ったことが知られる。この「他本」は前田本系統本とされるが、従来はそれぞれの「他本」は同一伝本と考えられ、俊蔭巻を補写し、藤原の君巻以下一九冊の校合にも用いられたとされてきた。だが近時、高田信敬氏によって、俊蔭巻は補配で、書風や筆風から第二冊以下より古い書写であると判断された。これにより、それぞれの「他本」は異なるものであることが明らかとなった。

また、高田氏は、補配して揃い本とする以前の一九冊に押されていた題簽は他の書物からの転用で、俊蔭巻はこの題簽を欠き、拙い手で「うつほ一初巻」と記しているとす。そして、表紙は、現在栗皮色古表紙の装丁だが、見返し料紙の新しさ・表紙補修状況と本文虫損の不一致等から、近代以降の改装と見て、見栄えを良くするために古表紙を転用したものと判断を下している。理由は判然としないが、氏辰の蔵書印「紀氏蔵書」があて宮巻以降には見られないことにも言及する。

こうした該本の所持者や書物の考究が進められてきた紀氏本であるが、本文についてはこれまで十分な検討がなされてこなかったと言つてよい。検討すべき点は二つある。一つは、「浜田本と前田本との中間的存在の感がある」とされている点である。笹淵氏は、紀氏本が他本による校合を経ている点を指摘しながらも、浜田本の解題では、「紀氏本は濱田本系統の親本に近いもの、やうに考えられる」としており、校合前の本文が浜田本よりも古いと考えているようである。そうであれば、浜田

本系統という本文系統自体を見直すことになるため、浜田本との先後関係を確認する必要がある。もう一つは、該本の校合に用いられた伝本の本文系統が前田本系統に位置する点である。後述するが前田本系統諸本は《A》《C》の三群に分かれる。各群によって本文の性質が異なるため、対校本である「他本」がいかなる本文であるかを見定めることが求められる。これによって前田本系統本の流通経路の一端を知る手立てともなるだろう。本稿では、これらの検討を通して、紀氏本の本文および校合の実態を明らかにしたい。

二、浜田本と紀氏本

紀氏本は「前田本と浜田本の中間的存在」であると言えるのか。先後関係を明らかにするため、浜田本と紀氏本の本文を比較検討する。

新美論の「諸本脱文表」（以下、脱文表）は、前半諸巻（後蔭／沖つ白波）を対象に、四系統における本文脱落の有無を一覧にしている。この脱文表によって各系統の先後関係を把握できる。脱文は『うつほ物語』における大きな異同であり、かつ、各系統のみならず同系統諸本の先後関係を明らかにする上でも有効であるため、脱文を基に両本を比較していく。脱文表によれば、前半諸巻の脱落箇所について両本に相違が見られなかったため、本稿の調査では、後半諸巻（蔵開上／楼の上）の脱落箇所を対象に検討を行う。

まず、四系統間の本文比較を通して、浜田本に見られる脱文は、以下の二七例である。掲出にさいして、脱落した箇所の

18		17		16		15		14		13		12		11		10		9		8		7		6		5		4		3		2		1			
								国讓中								国讓上						蔵開下		蔵開中		蔵開上											
49オ		47ウ		33オ		74ウ		64オ		57オ		50ウ		30ウ		25ウ		62ウ		59オ		47オ		21ウ		11ウ		9ウ		75オ		71オ		62オ			
給へははへりしやうとてくはしくせうし給つくり		ろにいれさせ給へりし大弁はたちにて		うちよりはしめせかいにの、しりていふやうには		をさしあゆみつ、まいりこん		中にいれてこしらふれとふねこきょうかふを		しものをかきよつきてものし給なる悦申さんとの給て		かしおやもなくてわれをのみたのみたりし		すなんん／＼せうそくしたりしにこそ時／＼も		給物など心してたてまつり給三条殿にかくて		やなてうひとをかさはならずよるつの事心にまかせて		はなとおほしそ		いと、くものし給けりといとおかしかり給宮そこになをよのまにもかならず世中になくなりてはおさ		昔はしはしこそ給しかとき／＼は		心ちうちさははしつむとすれとひかよみをおほく		ふちつほすこしのつみはえるらんやはむかしより		ものがはとあるを人々見給てめのとことはりやとて		わらひ給か、る		きぬなとくはへてせさせ給きたのおと、かくて		そこ、らさはかしなど御ものかたりしつ、み丁のう	
																																				本 文	

「丁数」は紀氏本、「本文」は前田本のものを示した。

27	26	25	24	23	22	21	20	19
楼の上下		楼の上上		国譲下				
46ウ	21オ	34オ	112オ	102オ	90ウ	82オ	81オ	58ウ
おほせたるをまつさはかの家のきんきかんら		はすた、二宮はかり女御殿とそみたてまつり給そちのきみにいとかたしけなしいき所もなくてか		さうそくときひろけてふし給ひていとよく申		花御らんしてわたらせ給へときこえ給つればまいり給をうちの御かときこしめしてすさく院に		きみたち御むこたちのなかにさりぬへき一人つ、
				十日もすくれはよるつのかしこしいはる、そ		なをき、給左おと、けにいとあやしうしつみ給へるを		日のみこおとこみこうみ給へりち、みかとは、きさき

浜田本の本文脱落は右のほかには見られない一方で、紀氏本は右に加えて他に独自の脱落箇所を数多く有している。以下に同様の方法で示す。【ミ傍】は見せ消ちして本文を傍記していることを表す。【目移り】は目移りによる脱文であることを表す。

4	3	2	1	
		蔵開中	蔵開上	巻名
6ウ	1ウ	3オ	26オ	丁数
かりになりぬ大将たちてひんかしの		むらはせんにくらはひとにまか、むらうたくは	おり物ひとつにはしるきれう一には	本文
		いぬ宮はさおはしますときこえさせよとなん【目移り】		

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	
楼の上下		国譲下			国譲中			国譲上				蔵開下			
80オ	22オ	91ウ	90ウ	88ウ	61オ	28オ	26オ	7ウ	83オ	42オ	33ウ	33ウ	52ウ	23オ	
思はぬそ心かるの御心やとの給へはいさやなとかは		あへなんまつくかほいと【ミ傍】		宰相の中将くら人の少将なといまはけしきもいたのをかたらひてよるつのため物をとらせて		物につ、みていたさせ給りんしには【ミ傍】		めてたくおはすあやのかいねりのひとへかさね		ある時はふししつみかしらもたけすなけき【目移り】		あるへきひと【ミ傍】		かたにしま、にやかてまかり	
								いとさく侍らんおほせことにしたかふとおもふ		いかなるちきりを【ミ傍】		ほとけさ【ミ傍】		かの君たちよにへ	

これら一九例の本文を四系統の代表伝本（前田本・浜田本・延宝五年版本・萩野由之本）はみな有しており、該本独自の脱文と認められる。また、該本はこれらを校合によって全て補入している。このように、該本では浜田本系統諸本で共通する脱落箇所に加えて、この一九例の本文脱落が生じていることから、先後関係として浜田本よりも先であるとは考えられない。

前半諸巻では他の浜田本系統本と同様の脱文が存在する該本が、後半諸巻ではこの脱文数が増大する。それとともに、後半諸巻になって目移りによる衍文が多発している。たとえば、紀氏本独自の脱落箇所を示した表の7「ほとけさ」は後文の「の給へは」を見せ消し傍記（あるいは補入）したものである。同様に、見せ消ちの本文を掲げると、以下の通り。

8 「いかなるちきりを」↓前文の「めさす」。

9 「あるへきひと」↓「あるへかくひと」。傍線部は前文

「かく」が目移りで混入したか。

14 「物につゝみていたさせ給りんしには」↓前文の「これ

よりもきこえんとてみてし」。

15 「と思ひたれといとまめやかにてけしきいとあし」↓前文の「くてみないてきゝたり大將見あはせて」。

18 「あへなんまつくかほいと」↓後文の「し給なんとはきこえ給な」。

このように、前文または後文の語句の衍文であることが知られる。このほかにも、衍文のため見せ消ちが施されている例として、

・「しけになくてをきみ給へは大將の」（国譲中／六二オ）

・「御つほねもわたらせ給はず」（同八〇ウ）

・「かへたてまつりたらむに……ことひきいて、はえかひ」

（国譲下／八五ウ）

が挙げられる。こうした目移りは衍文にとどまらず、脱文にも見られる。表の2「いぬ宮はさおはしますときこえさせよとなん」は前文が「となん」とあることによる目移り、11「ある時

はふししつみかしらもたけすなけき」は前文の「なけき」とあることによる目移りによって生じたものと推測される。こうした目移りの多さから見て、後半諸巻の書写態度は拙速の感が否めないように思われる。ただし、見せ消ちの箇所も含め、脱落箇所が紀氏本の書写段階に生じたものであるのか、親本以前の段階ですでに脱落が生じていたものであるのかは判然としないが、現存の浜田本系統諸本の中では、紀氏本のみに見られる。

三、前田本系統諸本の外題と本文

次に、校合に用いられた「他本」はどのような本文であったのか。この点を考える上で、前田本系統諸本について言及しておく必要がある。前田本系統についての詳細な検討は別稿に譲り、本稿では現段階で自身の調査によって判明している点を簡単にまとめておきたい。

現在確認される限りで、前田本系統諸本は一本である。所在の判明していない、荒木田久老本を除いた一〇本と、その外題に記された巻序と巻名表記を一覧にして示す（丸括弧は本稿で用いる略称である^⑩）。掲出にさいして、三群に分けられる前田本系（A）（C）の外題表記と、その外題を持つ伝本を①（⑩）で示した。なお、論点を明確にさせるため、ここでは並びの巻に関する記載の別には触れない。

・前田本系統諸本

①天理大学附属天理図書館蔵国籍類書本（国籍類書本）

②京都大学附属図書館蔵近衛文庫本（近衛文庫本）

・巻序と巻名表記

《A》①②③④ ¹³	《B》⑤⑥⑦⑧	《C》⑨⑩
一としかけ 二藤原のきみ 三た、こそ 三井かすかまふて	一としかけ 二藤原のきみ 三た、こそ 四かすかまふて	一としかけ 二藤原のきみ 三た、こそ 四かすかまふて
四さかの院 四井まつりのつかひ	た、こそのならひ 五さかのぬん 六まつりのつかひ	た、こそのならひ 五さかのぬん 六まつりのつかひ
五ふきあけ上 五ふきあけ下 五并菊のえん	さかの院のならひ 七ふきあけ上 八ふきあけ下 九さくのえん	さかの院のならひ 七ふきあけ上 八ふきあけ下 九さくのえん
六あて宮 七	ふきあけのならひ 十あて宮	ふきあけのならひ 十あて宮
八おきつしら波	十一無外題 十二おきつしら波 付かつらの巻	十一内侍のかみ 十二おきつしら波 付かつらの巻
九くらひらき上 十くらひらき中	十三くらひらきの上 十四くらひらきの中	十三くらひらきの上 十四くらひらきの中

- ③ 国立国会図書館蔵狩谷椽斎本（狩谷椽斎本）
- ④ 本居宣長記念館蔵本居建正本（本居建正本）
- ⑤ 宮内庁書陵部蔵御所本（御所本）¹²
- ⑥ 広島大学図書館蔵柏亭本（柏亭本）
- ⑦ 神宮文庫蔵林崎文庫本（林崎文庫本）
- ⑧ 無窮会図書館蔵無窮本（無窮会本）
- ⑨ 前田育徳会尊経閣文庫蔵前田家十三行本（前田本）
- ⑩ 天理大学附属天理図書館蔵毘沙門堂本（毘沙門堂本）

十一くらひらき下	十五くらひらきの下	十五くらひらきの下
十二国ゆつり上	十六国ゆつりの上	十六国ゆつりの上
十三国ゆつりの中	十七国ゆつりの中	十七国ゆつりの中
十四国ゆつり下	十八国ゆつりの下	十八国ゆつりの下
十五楼のうへ上	十九楼のうへの上	十九楼のうへの上
十六楼のうへ下	二十楼のうへの下	二十楼のうへの下

外題の表記によって分けられる伝本群は、本文の上でも、その特徴から同様の三種類に分けられる。以下に特徴を掲げた。

・前田本系《A》……浜田・流布・木曾本系統に生じている「共通脱落箇所」の六箇所全てが存在する。¹⁴た

だし、「共通脱落箇所」のある三系統には、各系統でそれぞれ独自の脱文が見られるのに対して、《A》には見られないことから、三系統の本文が後発であり、《A》から派生したものと考えられる。

・前田本系《B》……万治四年大火の後に禁裏で収集されたと考えられる御所本から派生した。浜田本系統と同じ脱落箇所を有する巻（嵯峨の院・祭の使・吹上上・吹上下）があるため、前田本系統と浜田本系統の巻をそれぞれ持つ混合本である。

・前田本系《C》……本文には「共通脱落箇所」や、他の三系統がそれぞれに有する脱文も一切見られない。また、前田本はその箱書に慶安四年に後水尾天皇が前田綱紀に下賜した本である

ことが見えるため、万治四年の大火以前の禁裏本の本文を伝えていると目される。新美論ですでに指摘されているように、前田本・毘沙門堂本は兄弟関係にある。

脱文の状況によって、脱落箇所のない《C》、浜田本系統本との混合本でありながらも、前田本系統の本文には「共通脱落箇所」のない《B》、「共通脱落箇所」のある《A》といった、本文の先後が想定される。

このように、現存する前田本系統諸本の外題や本文の脱落に着目した本文比較から、一口に「前田本系統」と言っても、複数の伝本群があることが分かる。この点を念頭に置き、次節では校合に用いられた伝本を前田本系統諸本との本文比較によって検討していく。

四、紀氏本における校合の痕跡

一九冊の校合に用いられた「他本」は前田本系統本であれば、浜田本系本文である紀氏本本文の脱落箇所は校合のさい前田本系統の本文が補われるはずである。よって「他本」の本文を校合による脱文の補入から具体的に想定できるのではない。以下、浜田本系統本の脱落箇所における紀氏本の補入有無を一覧にして示す。一覧表から前田本系の各群における本文の有無と補入の対応関係をみていくことで、「他本」の輪郭を捉えられるだろう。

掲出にさいして、「丁数」「本文」は第二節の表と同様の方法で示した。ただし、「本文」のうち、木曾本系統のみに見られ

る1「九郎宮に十郎大殿に十一郎」に限っては、荻野由之本を用いた。前田本系《A》《C》には浜田本系統が脱落した本文の有無を「○」「×」で、紀氏本には校合により本文が補われるものは「補」、補われていないものには「×」で示した。「ミ」は見せ消ちを表し、「ミ補」は見せ消ちし、本来あるべき箇所本文が補われていることを示す。掲出した本文の「□」は空白を表す。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻名	
									祭の使	嵯峨の院
9ウ	45ウ	27オ	24ウ	16オ	16オ	5オ	31オ	2ウ	丁数	本文
たけと、のひたるをえらひてかみよりしもまで	けのなに／＼もおしきものなくうしなぬこ、ら	さよふかく我おりてくるさかきはのえたやまふかく	むさしよりもてまう	の、事なとさためたまふぬのはかい	左大将殿……かつけ給	さほひめのほのかにそむる桜にはよひさしそむるふちぞうれしき	を殿のきんたちのあまたおはしますをさてもものし給	九郎宮に十郎大殿に十一郎	○	×
○	○	○	○	×	○	○	○	×	A	本文有無
×	×	○	×	×	○	○	○	×	B	
○	○	○	○	○	○	○	○	×	C	
×	×	○	×	×	補	ミ補	補	×	紀	

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10									
沖つ白波		内侍のかみ											菊の宴	吹上下	吹上上								
25才	1ウ	88ウ	78ウ	63才	59才	49ウ	37才	35ウ	35才	21ウ	3ウ	16ウ	2才	35才									
にしきたのすみらう中将のかた	せんしなかりしきさより	みゆるはましていとなむせぢなりける上御らんするに	こゝろえ	すやとのた給ふうへけしうそこは	けるさるは一日も一条とのにまいりて御かたにさふらひし	た、かのち、お	なかつ、むまにてさふらはんとて	あめしに	てむかへ給ふ上さふらひけるをなと	ほえず侍とそうすうへ	さらにひき所あるてといふ物なんお	ことかきり	て人などかすしらすいてきてあそふ	ひなれとお	なりこたみこそことさたまるへきた	はいまた、	さかなとてはやのたまふまめやかに	女のなさけあるかものいひか、りなとするかも	あらたまるらんと思ひ給るなんけふそたのもしきとき	いと所せきうちに	かはけにいと□□□□さてはものせん	はさりつれはいふかり申	はすこのわたりにもまはものしたたま
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×									
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	×	×									

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
国讓中						国讓上			蔵開下		蔵開中	蔵開上		
74ウ	64才	57才	50ウ	30ウ	25ウ	62ウ	59才	47才	21ウ	11ウ	9ウ	75才	71才	62才
をさしあゆみつ、まいりこん	かふを	中にいれてこしらふれとふねこさう	悦申さんとの給て	しものをかくよつきてものし給なる	たりし	かしおやもなくてわれをのみたのみ	そ時くも	すなん人くせうそくしたりしにこ	にかくて	給物など心してたてまつり給三条殿	つにまかせて	やなてうひとをかさはならはすよろ	の事心にまかせて	そこ、らさはかしなと御ものかたり
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	
楼の上 下		楼の上 上	国 讓 下									
46 ウ	21 オ	34 オ	112 オ	102 オ	90 ウ	82 オ	81 オ	58 ウ	49 オ	47 ウ	33 オ	
きかん	おほせたるをまつさはかの家のきん	そちのきみにいとかたしけなしいやい き所もなくから	はすた、二宮はかり女御殿とそみた てまつり給	さうそくときひろけてふし給ひてい とよく申	花御らんしてわたらせ給へとときこえ 給つれはまいり給をうちの御かとき こしめしてすさく院に	十日もすくれはよろつのかしこしと いはるゝそ	なをき、給左おと、けにいとあやし うしつみ給へるを	日のみこおとこみこみ給へりち、 みかとは、ささき	へき一人つ、	給へははへりしやうとてくはしくそ うし給つくり	ろにいれさせ給へりし大弁はたちに て	うちよりははしめせかいにの、しりて いふやうには
○	×	×	○	○	○	×	×	○	×	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	

まずは、紀氏本の対校本が前田本系統本であることを確認しておく。第一節で述べた通り、前田本系統との親近性が指摘さ

れる浜田本系統において、前田本系統との大きな違いは、いわゆる「桂の段」の有無である。前田本系統では春日詣・沖つ白波両巻にあるが、浜田本系統では沖つ白波巻にしかなく、それも「桂の段」の中途から記されている。春日詣巻にはないために、紀氏本では、巻末「返しなし」の後の空白に、補入記号とともに「イニ此間ニあり」と注記され、次丁から桂の段が補写されている（表の4参照）。

また、同巻では表の3「さほひめのほのかにそむる桜はよひさしそむるふちそうれしき」という歌の位置が系統によつて異なるが、前田本・木曾本系統は正しい位置を伝えている。紀氏本の場合、誤った位置にある「さほひめ」歌の位置を校合の段階で、正しく直した痕跡が見られる。7「さよふかく我おりてくるさかきはのえたやまふかく」も見せ消ちを施した上で、同様の処置をしている。

そのほか、校合による注記として、「此間三行ホト異本ニアケテアリ」（国讓上／四六ウ）、「此間六字分ハカリアケテアリイニ」（国讓中／二〇オ）がある。どちらも前田本系統諸本に共通して見られる、数行分・数字分の空白である。この空白は、他系統本には保持されていないので、対校本が前田本系統本であること、そして、同系統本と同様に空白を保っていたことが窺い知れる。

表の1「九郎宮に十郎大殿に十一郎」は木曾本系統のみが有する本文である。他の系統本はみなこの箇所を脱落する。紀氏本に補入がないのは、校合に用いられた「他本」にもないことを意味する。

この前提に立ち、表の32「いとくものし給けり」といとおかしかり給宮そこにはなほし、33「やなてうひとをかさはならはすよろつの事心にまかせて」、42「給へははへりしやうとてくはしくそうし給つくりたりし」、44「日のみこおとこみこうみ給へりち、みかとは、きさき」、45「なをき、給左おと、けにいとあやしうしつみ給へるを」、49「はすた、二宮はかり女御殿とそみたてまつり給」、50「そちのきみにいとかたしけなしやいきところもなくから」を見ると、紀氏本には補入があるのに対して、《A》では浜田本系と同じ箇所に脱落が生じていることから、校合に用いられたのは《A》ではないと言える。なお、この脱落箇所は新美論で述べられる、「共通脱落箇所」にあたる。

とすれば、《B》《C》の伝本群のどちらかが考えられる。嵯峨の院々吹上下の四巻には、5「てまれにみゆるはいとめてたくきよらにてときく」、6「の、事などさだめたまふぬのかいむさしよりもてまう」、8「けのなにくもおしきものないうしなぬこ、ら」、9「たけと、のひたるをえらびてかみよりしもまで」、10「はすこのわたりにもまはものしたまはざりつれはいふかり申」、11「かはけにいと□□^本さてはものせんと所せきうち」といった、浜田本系の脱落があるにもかかわらず、紀氏本には補入が一切見られない。このことは、「他本」にも浜田本系と同じ脱落が起きていたことが推測される。

先述の通り、《B》は嵯峨の院々吹上下の四巻が浜田本系本文、その他の巻が前田本系本文の混合本であるから、紀氏本における補入の状況と符合する。

そして、50「そちのきみにいとかたしけなしやいきところもなくから」は、《B》の伝本群のうち、御所本のみ本文を有し、他はみな脱落する。このことから、校合に用いられた「他本」は、御所本から派生した一伝本と考えられる。

なお、《A》でも同じ伝本群ながら、他の伝本が脱落する本文を有する事例が見られる。本居建正本は、14「さかなとてはやのたまふまめやかにはいまた、」、15「なりこたみこそことさたまるべきたひなれとお」、20「けるさるは一日も一条どのにまいりて御かたにさふらひし」、22「みゆるはましていとなむせちなりける上御らんするに」（以上、内侍のかみ）。狩谷掖齋本は28「心ちうちさはけはしつむとすれとひかよみをおほく」（蔵開中）、42「給へははへりしやうとてくはしくそうし給つくりたりし」、44「日のみこおとこみこうみ給へりち、みかとは、きさき」、45「なをき、給左おと、けにいとあやしうしつみ給へるを」（以上、国譲下）の本文を有している。

五、補われた俊蔭卷

紀氏本はもともと俊蔭卷のみを欠いた一九冊本であり、後に「他本」を以て補ったことが氏辰の識語には記されている。補配された俊蔭卷はどのような本文であったのか。校異・脱落箇所・異文注記を順に比較検討する。

まずは、俊蔭卷における前田本・浜田本系統間の校異を確認したい。細かな異同ではあるが、以下にいくつか例を示す。前者が前田本、後者が浜田本で、（ ）内は紀氏本における当該箇所の丁数を表す。

・ともからをほろほして―おほくのともからをほろほして
(五ウ)

・たて、の給しかは―かたぐのたまひしかは(一五オ)

・我も御返事きこえず―かたしけなくて御かへり事きこえず(一七ウ)

・さはき給らんとて―求給はんとて(二六ウ)

・はらひひけて―はらひのけて(四五ウ)

・なか／＼なるさまなれと―仄かなるさまなれと(五三オ)

・ことををかせ給て―琴を前にをかせて(六五ウ)

右のごとく両者で本文の対立が生じている箇所は五五例挙げられる。紀氏本はそのうち、五四例が前田本系と一致していることから、俊蔭巻は前田本系統であると認められる。

なお、唯一、紀氏本が異なるのが以下の例である。紀氏本のみ当該箇所の丁数を示す。

葉すゑこそ秋をもしらめねをふかみそれみちしはのいつか

忘・ん (前田本)

葉末・には秋をもしらめねを深・み其・道・芝・はいつか

わすれん (浜田本)

葉末・こそ秋をもしらめねを深・みそのみちしは、いつか

忘・ん (紀氏本／二五オ)

前田本系統諸本《A》《C》のうち、《C》の伝本群が先立つので、紀氏本は傍線部で「それ」から「その」に改めて、前田本の本文を「れイ」と傍記。二重傍線部で前田本が「の」とあるところ、傍記の「は」を採用して本文を改めたと考えられ

る。また、御所本も前田本と同じ本文を持つことから、紀氏本は僅かながら御所本より下ると見られる。

ついで、俊蔭巻における本文脱落を見ていく。同巻は六例脱文が存するが、以下、前田本系統本に加えて浜田本系統本も併せて示す。

掲出にさいして、「丁数」「本文」はこれまでの表と同様の方法で示し、本文の有無を「○」「×」で表した。また、「補」は補入記号とともに傍記、「イ」は異本注記として傍記、両方あるものは補入記号とともに異本注記として傍記していることを表す。

比較に用いた伝本の略号は以下の通りである。前田本系統本は、国籍類書本〔国〕・近衛文庫本〔近〕・狩谷椽齋本〔狩〕・本居建正本〔本〕・御所本〔御〕・柏亭本〔柏〕・林崎文庫本〔林〕・無窮会本〔無〕・前田本〔前〕・毘沙門堂本〔毘〕、浜田本系統本は、静嘉堂文庫蔵紀氏本〔紀〕・静嘉堂文庫蔵浜田本〔浜〕・宮内庁書陵部蔵猪苗代兼寿本〔兼〕。

丁数	前田本系《A》			《B》			《C》							
	本	文	国	近	狩	御	柏	林	無	前	毘	紀	浜	兼
1 6ウ	天女くたりまし くてあそひ給所 也たはやすくきた れる	○	○	○	○	○補	○	○	○	○補	○	○	○	○
2 10オ	そこにもおなしこ との給て…六人つ れて入給	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

よりも書写年次が古いと推定されることを踏まえると、それぞれの「他本」は別の伝本であると考えてよいと思われる¹⁶。

六、まとめ

以上、本文の比較検討を通して、紀氏本の本文や校合の実態を明らかにした。本稿で推定した点をまとめると、次の三点である。

- (一) 本文の先後関係として、紀氏本は浜田本よりも後発である。
- (二) 紀氏本の一九冊と校合した前田本系統本は、前田本系統と浜田本系統の混合本である前田本系《B》であり、御所本から派生した一伝本である。

(三) 補配された俊蔭巻は、前田本系統諸本の中でも本文として古い部類に位置する。

これまで「浜田本と前田本との中間的存在の感がある」とされてきた該本であるが、今回の検討を通して、浜田本よりも後に位置することが判明した。したがって旧来の認識は改める必要があり、校合本文が浜田本の本文よりも古く見え、とするのが正しい見解であろう。

また、該本は、一九冊の校合が宝永七年（一七一〇）九月五日から二九日にかけて「他本」によって行われ、欠けている俊蔭巻は、同年一〇月一四日に「他本」によって補配された。同巻は元々あった一九冊よりも紙質や書風が古いとされていたが、本文の上からも同様に古形を留めていることが確認された。

このように見てくると、紀氏本は前田本系《A》から派生した本文を持ち、二種の前田本系統本によって補配や校合がそれぞれ加えられたことになる。その点において、複数の前田本系統本の痕跡を留める、非常に稀有な伝本として位置付けられよう。

注

- (1) 中村忠行「宇津保物語に関する展覧書目録（附解説）」（『日本文学研究叢書 平安朝物語Ⅱ』有精堂、一九七四年）。
- (2) 野口元大執筆「うつほ物語」（『日本古典文学大辞典』岩波書店、一九八六年）。
- (3) 新美哲彦「『うつほ物語』の諸本——主要四系統の位置関係及び性格——」（『国文学研究』第一三七号、二〇〇二年）。
- (4) 内閣文庫本は一五冊本であるが、残存した冊の表紙や小口、背に焦げ跡や水損の痕跡を留めていることから、残りの五冊は焼失した可能性が考慮される。
- (5) 笹淵友一「うつほ物語諸本解題」（西村宗一・笹淵友一編『校本うつほ物語 俊蔭巻』興文社、一九四〇年）一五—一六頁。
- (6) 『禁裏御蔵書目録』に記載されている『うつほ物語』の外題は、前田本系統にも見られ、第一巻の内待のかみ巻には巻名が付されている。本文の先後関係では、浜田本系統は前田本よりも後発であるから、後に巻名が付されたものと考えられる。
- (7) 安藤菊二「紀氏本うつほ物語の校者紀氏辰」（『江戸の和学者』青裳堂書店、一九八四年）。
- (8) 前掲注5笹淵論。
- (9) 高田信敬「校勘の言葉——異本・他本をめぐって——」（『文献学の栞』武蔵野書院、二〇二〇年）の注12。
- (10) 前掲注5笹淵論 二三頁。
- (11) 前掲注1中村論。

(12) 当該本を「桂宮本」と称する先行研究もあるが、前掲注3新美論文で指摘されているように、「桂宮本」は俊蔭巻のみの一冊本を指し、正しくは「御所本」である。なお、小倉慈司「宮内庁書陵部所蔵御所本目録(稿)」(田島公編『禁裏・公家文庫研究 第六輯』思文閣出版、二〇一七年)では当該本が確認される。

(13) 本居建正本は、本来第四巻目の春日詣巻と、第十一巻目の内侍のかみ巻の巻序が交替している。また、複数の他系統本と校合されているようで、外題もその影響を受けている可能性が考えられる。そのため、本稿では外題ではなく本文脱落の状況を踏まえて、前田本系《A》に分類した。今後、より詳細な検討を要する。

(14) 前掲注3新美論では、浜田・流布・木曾本系統に共通して見られる脱文である、「共通脱落箇所」が前田本系統には見られないとするが、前田本系統諸本のうち《A》には見られており、この指摘は誤りである。

(15) この点については、前田本系統の本文に関する別稿で詳しく述べた予定である。

(16) 前掲注9高田論の注では触れられていないが、春日詣巻の「桂の段」は「他本」によって補写されている。その筆跡は俊蔭巻のものとは異なるため、高田氏の言うように、俊蔭巻は補写ではなく、補配されたと考えてよいだろう。

また、俊蔭巻の題簽が「初巻」とあるのみで、巻名を記していないことは、首巻であることは分かりながら、巻名までは分からなかったことになる。おそらく俊蔭巻に補配された「他本」は、元々俊蔭巻一冊本であったのだろう。俊蔭巻一冊のみで存在する伝本は、題簽や外題が「うつほ物語」と記されており、巻名は記されていない。たとえば、宮内庁書陵部蔵桂宮本『歌書目録』(F四一—二六)によれば、俊蔭巻一冊本である桂宮本『うつほ物語』は「うつほ」とある(現在、同本には原題簽の剥落痕の上に「宇津保物語俊蔭巻完」との後補題簽が付されている)。なお、紀氏本が補配された時点で、すでに延宝五年版本がすでに刊行されているが、巻序は乱れており、どの巻が首巻であるか分からない。

【付記1】本稿で用いた「うつほ物語」伝本の本文は、以下の原本・国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムに拠る。貴重な資料の利用に際し、ご高配賜った各所蔵機関に御礼を申し上げます。

《前田本系統》

国籍類書本…天理大学附属天理図書館蔵本(081/イ21)

近衛文庫本…京都大学附属図書館蔵本(430/ウ1貴)

狩谷校蔵本…国立国会図書館蔵本(寄別5-4-1-1、寄別5-4-2-1)

本居建正本…本居宣長記念館蔵本(マイクロ・37-33-3)

御所本…宮内庁書陵部蔵本(439-16)

柏亭本…広島大学図書館蔵本(大岡/2047)

林崎文庫本…神宮文庫蔵本(1539)

無窮会本…無窮会図書館蔵本(11036)

前田本…前田育徳会尊経閣文庫蔵本(124-古)

毘沙門堂本…天理大学附属天理図書館蔵本(91334/イ21)

《流布本系統》

延宝五年板本…国立公文書館蔵本(202-0834)

《浜田本系統》

浜田本…静嘉堂文庫蔵本(512-5-21124)

紀氏本…静嘉堂文庫蔵本(511-17-21106)

《木曾本系統》

荻野由之本…東京大学附属図書館蔵本(マイクロ・26-3)

【付記2】本稿は、学術研究助成基金助成金(研究活動スタート支援/課題番号20K21976)の成果の一部である。

(たかはし・りょう)